Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-12

平清盛の対中国外交と大輪田泊

高橋, 昌明

(Citation)
海港都市研究,2:27-39

(Issue Date)
2007-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/80030016

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/80030016

KOBE UNIVERSITY

平清盛の対中国外交と大輪田泊

髙橋　昌明
(TAKAHASHI Masaaki)

Ⅰ　清盛の福原への退隠

12 世紀の前半、院政[1]の武力的支柱として台頭してきた伊勢平氏は、保元の乱（1156 年）、平治の乱（1159 年）という二つの内乱を経て、中央の政局を左右する強大な政治勢力としての位置を確立する。平治の乱後、二条天皇（在位 1158 － 65）親政派と後白河上皇（在位 1155 － 58）の対立が激化。平清盛（1118 － 81）は両勢力の間にあって、巧みに政界を遊泳。急速な官位の昇進を果たし、仁安元年（1166）内大臣、翌仁安２年２月には左右大臣を超えて太政大臣と、異例のスピードで出世していった。家格が絶対的にものをいう貴族社会で、公卿という上流貴族の子でない人物が大臣まで進んだのは、安和２年（969）年以来、実に 200 年ぶりのことである（『花園天皇宸記』元応元年６月 21 日条）。この当時、太政大臣それ自体は一種の名誉職で、むしろ辞任後、前大相国[2]という肩書きで、政界に発言することに意味があった。

彼も僅か３カ月で辞任し、平家の表の顔、氏長者（うじのちょうじゃ）[3]を嫡子重盛（1138 － 79）に譲る。ところが、いよいよこれからと言う時に大病を患い、翌年２月に出家をした。奇跡的に一命は取りとめたものの、まもなく摂津国八部（やたべ）郡平野、現神戸市兵庫区湊山町辺にあった福原山荘に移る。仁安４年正月～２月のころと推定され、以後居住すること 10 年以上に及んだ。

清盛は普通六波羅入道といわれる。平家の本拠が京都東山の六波羅にあったからである。しかし、福原に退隠する時、重盛に六波羅館を明け渡し、その後ほとんど足を踏み入れた形跡がない。それまで同居していた清盛と妻時子は、ともに六波羅を出て、かたや福原かたや西八条に居を移した。西八条邸は時子の持ち物で、清盛が福原から上洛した時には決

1　当時幼い天皇に代わって、その直系尊属である上皇（退位した天皇）や法皇（出家した上皇）が政治に積極的に関与していた。その中でも天皇家の家長を治天（ちてん）といい、退位した治天が政治の実権を握っている政治のあり方を、院政という。

2　大相国は太政大臣の唐名（中国風の呼び方）。

3　一族の宗家として、氏人を統率して朝廷に仕え、祖神の祭祀や叙爵推薦・処罰などをつかさどった。

まってそこに入った。清盛夫婦は氏長者重盛と、そういうかたちで完全に棲み分けをしていたのである。

さて、清盛が、神戸市域と特別な関係をもったのは、福原転居の 7 年前に遡る。応保 2 年（1162)、彼は摂津国八部郡の国衙領[4]を領有する権利を得たらしく、家司の藤原能盛に一郡全域の検注[5]を命じた。八部郡は摂津国の最西部に位置し東は兎原（うばら）郡、北は有馬郡および播磨国美嚢（みなぎ）郡、西は同明石郡に接している。南に開けるのはもちろん大阪湾。現在の行政区でいうと、神戸市中央区の西半（旧生田区地域)、兵庫区・長田区・須磨区の全域、北区の一部にわたっている。

能盛の一郡検注実施によって郡内 7 カ荘も検注を受け、その際九条家領輪田荘の 31 町が小平野（こびらの）荘・井門（いと）荘・兵庫荘・福原荘のために押領されたという（『鎌倉遺文』1290 号)。輪田荘は現兵庫区の湊川神社から和田岬の沿岸地域にかけての地域である。これにたいし福原荘は旧湊川の中流域、現兵庫区荒田町・平野町から、かつて宇治野とよばれた現中央区中山手通付近にかけた地域を中心にして、海浜部にまで及んでいた。小平野荘はその一部かと思われる。兵庫荘は長田区の刈藻川（新湊川）と須磨区の妙法寺川に挟まれる地域、井門荘も長田区から須磨区にかけて存在したと推定される荘園である。これらの諸荘は近接して存在し、しかも相互に入り組み複雑な関係にあった（今井 1982：38 － 43)。平家が八部郡を知行していた間は､郡内 7 カ荘は事実上平家領と化してゆき､輪田荘の中にあった和田の浜も福原荘に押領されてしまったという。和田の浜は古代以来の重要港・大輪田泊が存在した場所である。

II　承安の外交

清盛が福原山荘に居を定めたのはなぜか。いくつかの要素が考えられるが､その一つは､大輪田泊の存在であろう。山荘の南約 2.5 キロにあったこの港は、瀬戸内航路の要港だった。大阪湾は、そこにそそぎこむ河川の排出する大量の土砂で水深が浅く、大船の出入りに難がある。このため近世では、京への物資は兵庫津で小船に積みかえ、淀川を遡上するのが定法だった。つまり、大輪田泊は瀬戸内海を東に進んだ大型船の最後の寄港地になる必然性がある。ここを押さえることは、西国の物流の多くを、我が手にたぐりよせることを意味した。

4　平安中期以降、国守の統治下にある土地。国領。
5　国守・荘園領主・在地領主などが、支配地の租税・年貢などの徴収の基準を定めるため、田畠の面積・耕作状況などを調査すること。

いや、たんなる内海水運の掌握にとどまらない。嘉応２年（1170）９月になると、宋人が福原にやってきた。宋人の来訪ともなれば、たまたまなどであろうはずがない。中国古代から宋代までの諸制度の沿革・変遷を記した『文献通考』によれば、その前年乾道５年（1169）日本国が明州の「綱首[6]」に託し、宋朝に貢物を進めてきたとある（巻 324）。この使の実態は清盛のそれで、宋人が福原に来たのは、その返礼という形だったのではないか。ちなみに同じ年の正月 30 日、高麗国では国王毅宗が離宮で宴し、群臣に宋商および日本国の進めた玩物を賜与している（『高麗史』世家　毅宗 23 年正月丁亥条）。日本からの進貢が南宋以外にも向けられていたことを示すものとも考えられる。

明州は杭州湾の南岸東端、甬江（ようこう）下流平野の中央にある。今日の現浙江省寧波（にんぽー）のことで、その発展は唐中期にはじまる。市街地の南西にある千メートル前後の四明山にちなんで、明州と名づけられた。南宋後半に慶元府と改名され、元代には慶元路と改められる。明の洪武９年（1376）になり、この地を抑えていた海賊平定の意味をこめて、寧波府と改称された。地勢や海流、風向など自然条件に恵まれ、南シナ海・東シナ海の海上交通が集中し、隋・唐以来、中国の最重要海港の一つとして栄えた。日本からも遣隋使・遣唐使以来、多くの船舶が向かっている（斯波 1988：459 － 481、同 1992：13 － 19）。

当地には市舶司が置かれた。中国の海港に置かれた貿易管理機関で、外国船の積荷の臨検、約 10 分の１の課税、香料・象牙などの専売品の買収や販売、出港許可証の交付、船籍管理、貿易振興、密輸禁止にあたった。開元２年（714）広州にはじめて設置され、アラブ人の活動・居住でにぎわった。宋代に入り中国の造船・航海術が飛躍すると、広州・泉州（以上南海貿易）、明州・杭州・秀州（以上南海および日本、高麗貿易）、密州（高麗貿易）などに置かれている（藤田 a1943）。

宋人が福原に現れた時、京都では城南寺の競馬が行われていた。後白河法皇はそれが終わるや福原山荘にかけつけ、直接宋人を「叡覧」する（『百練抄』９月 20 日条）。９世紀末の宇多天皇などは、どうしても外国人を接見せねばならぬ時は簾ごしに見よ、「直に対（むか）（対面）ふべからざらくのみ」と皇子に訓戒していたから（『寛平御遺戒』）、後白河の放胆な振る舞いに、常識人の右大臣九条兼実は「未曾有の事」「天魔の所為か」と仰天した（『玉葉』９月 20 日条）。

承安元年（1171）７月、清盛は羊５頭・麝鹿１頭を後白河に進上している（『百練抄』同年同月 26 日条）。ともに日本には生息しない動物で、中国大陸からもたらされたものに違いない。

続いて翌年９月、明州の沿海制置使から、後白河法皇と清盛入道に方物（ほうぶつ）（土産）が届

6　船長または船荷の宰領者。

いた（『玉葉』9月17・22日条、『師守記』貞治6年5月9日条）。方物には送文が付き、1通は「日本国王に賜ふ物色（ぶっしょく）」とあり、いま1通は「日本国太政大臣に送る物色」とあった。貴族たちは、これは皇帝・孝宗（在位1162－89）からの直接の土産でなく、「明州の刺史[7]」からのもので、しかも「国王に賜ふ」というのは、対等であるべき外交慣例を破り無礼だから、返牒[8]を出してはならない、と反発した。

これまで誰も注目してこなかったが、貴族たちが「明州の刺史」といっているのは、正確には沿海制置使のことである。沿海制置使は南宋の時代、水軍を統轄して南海貿易[9]（に害をなす海賊を取り締まり、海路の平静を実現するため、浙江・福建などの沿岸地方に設けられた制度である（『宋史』職官志第120　制置使）（日野1937）。浙江では、紹興3年（1133）明州に設置され（『宋会要輯稿』職官40―5）、明州の長官が兼任していた。同地には水軍も2千人配備されていた（『宋史』兵志巻189）。

同時期この職に起用された人物たちは、いずれも王族や皇帝の外戚、皇帝親衛軍の最高司令官を経験したような大物たちで、海賊平定に熱を入れていた（『宋史』列傳第224　益子琚など）。孝宗即位の翌々年その地位についた王族の末裔子瀟のころは、郡の胥吏（しょり）[10]を賄賂で抱きこんだ海賊の活動が盛んで、商船も不通になっていた。そこで礼をもって土豪を招き、郡の胥吏を率いさせ、各方面から海に入れた。その時胥吏らに、命を用いる者には厚き賞あり、さもなくば殺す、容赦はしないと告げた。震え上がった胥吏は、競って賊の本拠を教え、賊をことごとく擒にできたという（『宋史』列傳第6　子瀟）。

承安2年日本に使を送ってきた知明州兼沿海制置使は、孝宗皇帝の同母兄趙伯圭であったが、彼も猖獗を極めた海賊に対し、人を遣わしてまず1人の有力者を説得して帰降させ、つぎに彼を派遣して別の仲間を擒にした。2人は凶暴で絞猾だったが、伯圭は手なづけて用いたので賊党はついに散り散りになった（『宋史』列傳第3　伯圭）。

宋は高度に中央集権的な国家だから、建国当初の全国約250の州は皇帝直属、長官も中央の官僚が派遣されてきた（宮崎a1992）。だから、知明州兼沿海制置使からのそれだといっても、決して一地方官のスタンドプレーではありえない。第一、百年このかた宋からの使は、一貫して明州からもたらされているのであって、地方官の使だからという批判

7　州の長官、宋代は知州と改称。
8　牒は直属関係にない役所間で交換される公文書のこと。
9　中国と東南アジア、南アジアとの間の海上貿易。南海貿易に従事する商人は、はじめ東南アジア各地やインドから中国に来航する商人であったが、7世紀ころからペルシア人など西アジア商人の中国来航が盛んになった。そして9世紀ころからは、中国人商人が直接東南アジア・南アジアの各地に進出し、13世紀には西アジアへも進出した。
10　行政実務を担当した無給の下級役人。

は、史実に目をつぶったためにする非難である。

翌年３月後白河法皇は、清盛に返書を出すことを命じた。同書は「日本国沙門静海[11] 牒す　大宋国明州沿海制置使王」と書き出され、内容も土産の美麗珍重を大いに誉めたもので、外交慣例と違うことを詰問せよの声は無視された。対等であるべきといっても、それは日本側の一方的な願望で、清盛には、世界の超大国と張り合う世間知らずの自尊心など、一顧の余地もなかったのである。後白河が清盛の名で返書を出させたのは、実質推進者だからというだけでなく、貴族たちの反発に配慮し、相手方の沿海制置使とつり合わせるために違いない。

後白河法皇は宋の使者に、蒔絵の厨子に入れた色革(いろかわ)[12]30 枚と蒔絵の手箱に納めた砂金百両の贈物を賜い、清盛も「剣一腰」「物具（鎧）」などの贈物を添えた（『異国牒状記』、『玉葉』３月 13 日条、『百練抄』３月３日条、『師守記』貞治６年５月９日条）。

III　中国側の意図

ところで、今回の日本への使は、沿海制置使司の名で送られてきた。同一人の兼務とはいえ、文官職たる知州ではなく海賊制圧を任とする沿海制置使からの派遣だった点に、軍事・治安問題が目的だったことを読みとるべきであろう。『宋会要輯稿(そうかいようしゅうこう)』という書物によれば、同年５月日本の返牒・贈答品が宋皇帝のもとにもたらされた時、孝宗は枢密院に命じ、明州沿海制置使司に、日本へ往復した綱首と水軍の使臣（使節）の労をねぎらわせている（巻 199　蕃夷７　歴代朝貢）。

枢密院はいわば参謀本部にあたる中央の軍令機関で、宋の時代、各軍の司令官は兵は指揮するが統帥権はもたず、枢密院を通して皇帝の命令がこなければ、一兵たりとも動かすことができなかった。『宋会要輯稿』の記事は今回の日本への使節派遣が、皇帝の指示にもとづいて行われたことをなによりも雄弁に物語っている。

中国側の判断は、日本との貿易を本格化するにあたって、貿易船の安全が条件、とくに日本近海・瀬戸内海の島嶼海域における海賊の除去が不可欠、ということなのであろう。そのためには、日本の軍事面での最高実力者・清盛入道の力が欠かせない。しかも、平家は父忠盛以来瀬戸内海の海賊平定に大きな実績をもつ（髙橋 2004）。瀬戸内航路の整備とは、施設の問題というより、人災、すなわち海賊への対策を万全にすることである。

11　清盛の法名（仏門に入って僧となる人に、その宗門で授ける名、また在家仏教徒に、多くの場合、死後におくる名）、浄海とも。

12　色や模様を染めつけた革。そめかわ。古来より武具・馬具などに用いられた。

こう考えてくると、清盛が剣と鎧を返礼の贈物にしたのは、それへの同意のサイン、と解することができる。当然うるさ型の兼実は、「武勇の具を境外に出す」と批判した。武器搬出禁止という東アジア国家の原則からいえば一応正論であるが、宋側の要求内容まで理解しての発言とは思われない。

要するに、承安２～３年の日宋の接触は、貿易開始の前提として海賊の除去を求める宋側と、伝統的な外交姿勢を実質的に踏み越えていこうとする清盛・後白河の動きが、交差し合意を見た一幕といえよう。以後日中貿易は大幅に拡大したと考えられるが、いかんながらそれを直接示す史料は残っていない。わずかに『平家物語』巻１「吾身栄花」が、平家の繁栄を語るのに「楊州の金・荊州の珠・呉郡の綾・蜀江の錦、七珍万宝一として欠けたる事なし」と中国のぜいたく品をあげているのは、美辞麗句でなく、清盛の中国貿易への熱中ぶりと、その結果としてのおそるべき富力を示すねらいであろう。

もちろん流入品は、こうした高価・珍奇なものばかりではない。平家の時代以降、一番の輸入品は唐・宋の銅銭だった。よく知られているように、日本の古代国家は皇朝十二銭と呼ばれる各種銅銭を発行したが、やがて使用は途絶えた。12 世紀中期、再びその使用が始まるが、流通したのは日本政府が鋳造した銅貨ではなく、中国で現に使用されている銭だった。つまり日本は、交換手段を自前で用意するのでなく、輸入に頼ったのである。中世日本は、その後も中国銭を輸入し続ける。それは、20 世紀第三四半期の世界が、アメリカの圧倒的な経済力を背景として、貿易や国際資本取引において、主にドルで通貨表示をしていたように、日本が宋や元・明といった中国の経済圏に組み込まれたことを意味しているのだろう。清盛の時代は、その体制のはじまりだったのである。

しかし、11 世紀中葉以降まったく使用の絶えていた銭が急に出まわれば、社会や経済の混乱は避けられない。事実、宋銭の大量流通は、社会問題の発生をともなっていたらしく、治承３年 (1179) お多福風邪らしき病が流行った時、人は「銭の病」と呼んで忌避した (『百練抄』同年６月条)。

一方、日本からの輸出品では古くからの砂金・真珠・硫黄などに加え、杉・檜・松などの板もしくは角材が重要である。硫黄は黒色火薬の原料に使われる。北宋は火薬を金・西夏など北・西の敵対国との実戦用に配備したのでは、との推定もされている（山内 2003：252)。また中国側史料で見ると、日本産木材の輸入が始まったのは 12 世紀 30 年代以降で（藤田 1943:493 － 504)、日本における銭の流通再開期と時を同じくしている。輸出むけの何万銭という銅銭は、船に積みこまれた時バラスト（底荷）の役割を果たす。帰りの船荷が砂金や真珠だけだと、軽すぎて吃水が上がり危険である。それで木材を積んで重心を下げる。当時中国では、産業の躍進によって自然の収奪が進み、森林がどんどん消滅、薪炭から石炭へのエネルギー転換が進行していた。木材は貴重になりつつあったか

ら、まさに一石二鳥といえよう（宮崎 b1992）。

Ⅳ　経島の築造

これまで述べた宋使が、中国船に乗ったままじかに大輪田泊に来航したのか、それとも博多で和船に乗り換えたのかは明らかでない。従来外国船は博多で応対させ、門司関をぬけて瀬戸内海に入ることが禁じられていた。もし外国船が博多を素通りし、都近くの大輪田泊までやってくるとすれば(事実遅くとも治承4年＜1180＞にはそれが実現していた)、外国貿易の管理をしていた大宰府の府官[13]の権限・役得の否定と平家への吸収を意味する。このためにも、清盛や弟頼盛はその長に就任して大宰府を掌握、府官を家人化し懐柔せねばならなかったわけである。

承安2年から3年にかけての日宋交渉は、大輪田泊や福原の歴史に新しい一頁を開いた。やがての海運の本格化にそなえ、清盛が大輪田泊の改修を始めたからである。兵庫嶋という平安版ポートアイランドの築造に着工したのが承安3年（『帝王編年記』）、完成は2年後の安元元年（1175）である。

大輪田泊は当時の史料では「東南の大風常に扇(さわが)しく、朝夕の逆浪凌ぎがたし」（『山槐記』治承4年3月20日条）といわれている。とはいえ、大輪田泊の後身である現在の兵庫港で、実際こんな風が吹くのだろうかという、素朴な疑問もある。そこで当海域を熟知する矢野吉治氏の教示を仰ぐことにした。氏は神戸大学海事科学部（もと神戸商船大学）の実習船深江丸の船長である。

氏によれば、大阪湾では春から秋にかけて、天気が良ければ、南～南西～西寄りの風が吹く。海水は比熱が大きいので、温まりにくく冷めにくい。逆に陸地は暖まりやすくさめやすい。昼間太陽熱の放射により陸地が暖まり、気温が上昇するとともに大気の膨脹によって気圧が下がり、陸上では上昇気流ができる。この上昇する大気を補うため、海から陸に向けて風が吹く。天気の良い昼間の大輪田泊では、南寄りの強い風も十分ありうるとのことである。

となればただの誇張ではなく、実際に人工島は波よけ風よけを目的に造成されたのだろう。しかし、人工島を造るのは口で言うほど簡単なことではない。せっかく築いたものも翌年風波でたちまち崩れ去った。そこで石の表面に一切経[14]を書いて船に積み、船ごと沈めるという工法がとられたという（『延慶本平家物語』巻6太政入道経島を突給事）。人工

13　太宰府の三等官・四等官。
14　経蔵・律蔵・論蔵の三蔵およびその注釈書を含めた仏教聖典の総称。大蔵経。

島を経島とも呼んだのは、このためである。

工事責任者になったのは、阿波を本拠とする平家の有力家人田口成良（阿波民部大夫）である。成良は平家水軍の一翼を担う有力者であり、吉野川下流南岸の沖積地たる桜庭を中心に勢力をふるった（山下 1991）。

『兵庫北関入船納帳』という史料により、15 世紀の畿内には、阿波・土佐の南海道産の榑（くれ）[15]・木材が大量に流入していたことが分かる。その産地の中心は、過伐によってかつての美林も一部を残すのみとなっている高知県安芸郡の魚梁瀬である。高温多雨で生育に適し、筏による搬出と海運の便に恵まれていたからで、この条件は平安末期でも変わらない。成良や彼の関係者は、木材の漕運にかかわりながら、富と勢力を拡大していった可能性がある。阿波から淡路島以西の瀬戸内海に向かうには、鳴門の渦潮を避けて、明石海峡を通らねばならない。大輪田泊の改修は自らの利害にも合致し、また港修築のノウ・ハウももっていたのだろう。

日本産の木材は良質をうたわれ、孝宗も淳熙年中（1174 － 89）禁中に「日本国の松の木」をもって一堂を建て、「翠寒堂（すいかんどう）」と名づけその風雅を愛したという（『建炎以来朝野雑記』甲集巻 1 孝宗恭倹条）。彼の積み出した魚梁瀬の杉材の一部が、兵庫の津に来航した宋船の帰りの荷となってはるか南宋の地に運ばれ、詩人や美姫に木目の美しさを愛でられた、との空想は楽しい。もっとも、中国では一般民衆まで遺骸を納める棺材に金を費やすことをいとわなかった。乾道 4 年（1168）の序を持つ陸游の『放翁家訓』には、「四明（明州）・臨安にて倭舟至りし時、三十千（30 貫）を用ふれば、一佳棺を得べし」とあり、実際には日本材による良質な棺への需要が大きかったようである（岡 2003）。明州城内には棺材を加工製作する「棺材巷」もあった（『開慶四明続志』巻 7）。

V　千僧供養

さて、清盛が福原に住むようになってから、当地では 3 月と 10 月中旬過ぎの年 2 回、それぞれ 3 日程度の日程で千僧供養の仏教儀式が催された。記録に残るものだけで 6 回に及ぶ。たとえば、承安 2 年 3 月 15 日には、入道大相国福原亭で後白河を迎え、千人の持経者[16] が『法華経』を供養している（『百練抄』）。『古今著聞集』によれば公卿・殿上人からの施しはいうまでもないが、諸国の民衆も結縁のため、釘や餅 4、5 枚を差し出したと伝える。そして福原亭とはいうものの、主なる行事は和田の浜で行われたようで、浜辺

15　山出しの半製品・中間製品の建築用板材。平安時代の規格では長さ 12 尺、幅 6 寸、厚さ 4 寸。
16　持経、特に法華経を読誦する僧。

に仮設の建物を建て道場にした。仏が千体準備されたと言うから僧 1 人につき 1 体である。当然『法華経』も千部準備された。この時の千僧の中には後白河自身も加わっている。48 檀の阿弥陀護摩もあったというから、千僧供養の一連の行事として別途に阿弥陀供を修したのであろう（巻 2 － 59)。

この『法華経』千僧供養では転読をしたという。転読とは経題や毎巻の初めと中程と終りの数行を読み、経巻を繰り広げて巻いて、経文の全巻通読になぞらえることをいう場合がある。それは『大般若経』6 百巻などの大部の経典の場合で、この時は『法華経』の経文を、順を追って読誦したのであろう。「読」は経を見てよむこと、「誦」はそらでよむこと、つまり 声を出して経文を読むことで、読経ともいう。

この法会では園城寺の法印公顕が導師を務め、その説法に感激した後白河は、彼を僧正に任ずると言い出した。彼の師匠の公舜がまだ僧正になっていなかったので、情報を得た兼実などは、事実なら未曾有のことと反発している。千人の転読は 17 日まで続いて法皇は 20 日に京都に帰った（『玉葉』)。

また同じ年の 10 月 15 日から和田浜で千僧供養がおこなわれた。これに先だって、後白河は一身阿闍梨に任じられた[17]。後白河自らが清盛に加持祈祷を加えることが予定されており、そのためには大阿闍梨でなければならないというので、とくにこのことがあったという。兼実はこれにも「希代の珍事､上代にいまだこのこと非ず」と仰天している（『玉葉』)。

千人の僧というのはオーバーなようにも見えるが、厳島神主の佐伯景弘など、3 月の時には、河内国の 7 つの寺院の僧侶と厳島の住僧、合わせて 10 人を準備している。あちこちでこうしたリクルート合戦がくり広げられたのだろう（『平安遺文』5055 号)。

千僧供養の主催者になることは、だれにでも可能だったわけではない。承安 2 年 10 月の時で、和田の浜に集まった僧は、一身阿闍梨として後白河、伴僧[18] が 20 人、彼らは皆園城寺関係者で僧綱 8 人、有職[19]10 人、非職[20]2 人、権僧正公顕、仁和寺の守覚法親王（後白河の第 2 皇子)･延暦寺の覚快法親王（鳥羽天皇の第 7 皇子)、前大僧正覚忠も顔を見せ、自余の僧綱済々という豪華さだった（『帝王編年記』承安 4 年[21]10 月条)。当然莫大な費用がかかる。

17　一身阿闍梨とは、名門の出であることにより、朝廷から一代を限って阿闍梨の地位を与えられた者をいう。
18　導師や主役を勤める高僧に従って、威儀を整え雑事を勤める僧。
19　凡僧で阿闍梨などの職ついている僧、僧綱につぐ僧官。
20　凡僧で職についていない僧。
21　史料は 4 年とあるが、諸種の点から 2 年の事実を述べたものである。

主催場所も、院政期に限っても大極殿・法勝寺・延暦寺・興福寺・東大寺に限られている（小松 1996:357 － 377)。京都で行うならともかく、この顔ぶれをこの地にそろえること自体が大変なことである。第一､分不相応の思い上がりだという非難を許さない門地･身分が必要だ。清盛の富と勢威、および白河の落胤という生まれがそれを可能にした。

だが、なぜ和田浜での千僧供養なのか。この問いについては、同地で『法華経』を転読したということが、答えになると思う。和田の浜の範囲は明確ではないが、その浜を「千壇行法によりて千僧と謂ふ」という史料もある（『帝王編年記』承安 4（2）年 10 月条)。近世兵庫津では、西国街道の宿駅に指定された背後の陸部を岡方、港湾機能を持つ南北に細長い一帯を浜方といった。兵庫津を描いた最古の地図[22] には、須佐入江の南に「千僧」という地名も見える。それらから、おおむね大輪田泊から南の和田岬まで海浜の一帯を指すものと思われる。

『法華経』の第 12 章にあたる「提婆達多品（だいばだったほん）」には、文殊菩薩が海中で『法華経』を説くことにより、沙竭羅（サーガラ）龍王の娘を即身成仏[23] させる、という竜神教化の説話が見える。竜は水神・海神であり、その怒りは風波をまき起こし海難の原因になる。『源氏物語』若紫巻に、近隣の須磨・明石の沖には海竜王が住むと見えることを念頭に置くと、和田浜での『法華経』読経に、海神をなだめ、海の平安を実現する願いがあった、と見ておかしくない。『法華経』第 25 章の「観世音菩薩普門品（ふもんぼん）」（『観音経』）には、「もし多くの人達が諸種の苦悩を受けたときに、観世音菩薩のことを聞いて、一心に名（みな）を称えるならば、観世音菩薩は即時にその音声を観じて、みな解脱させてくれる」とあり、その例は以下の如しとして、7 難をまぬかれることを説く。

そして、7 難のうち羅刹（らせつ）（鬼）の難については、「若（も）し百千万億の衆生ありて、金・銀・瑠璃・硨磲（しゃこ）・瑪瑙（めのう）・珊瑚・琥珀・真珠などの宝を求めんがために大海に入らんに、仮令（たとい）、黒風その船舫を吹きて、羅刹鬼の国に飄はし堕しめんに、その中に若し乃至（ないし）、一人ありて、観世音菩薩の名を称えなば、この諸（もろもろ）の人等は皆、羅刹の難を解脱ることを得ん」とある。海外貿易に出かけようとして、宝を積んで大海に乗り出した時に、大風が吹いて、鬼の国に吹き流されたときに、観音さんと称えたら、みな「羅刹の難」を逃れることが出来るというわけである。

同じく観世音菩薩の救済の働きを説いた個所では、「或いは巨海に漂流して、竜・魚・諸々の鬼の難あらんに、彼の観音の力を念ぜば、波浪も没すること能（あた）はざらん」、大海原に漂流して、諸々の難があったとしても、観音の力を心に念じれば、大波も我々を海没さ

22 元禄 9 年（1696）摂州八部郡福原庄兵庫津絵図。
23 人間がその肉身のままで究極の悟りを開き仏になること。

せることができないという。船乗りにとって海難よけの信仰は不可欠のものだし、『法華経』はもともと商人の世界で信仰せられたもの。観世音菩薩が、海外貿易を行う商人、船乗りの世界で信仰されたゆえんである。千僧供養の『法華経』読誦は、やはり浜辺で海に向かって行われねばならなかったのである。

ちなみに、2006 年の 2 月末、筆者は寧波や天台山に短い旅行をする機会があり、その時寧波東郊 16 キロの地にある阿育王寺を訪れた。南宋の時代、中国禅林の五山・十刹の制が設定された時、五山の第 5 位にランクされた名刹である。阿育王寺は平安後期の日本では舎利信仰の寺として聞こえていたが、現在ではむしろ観音信仰が、人びとの心に深く根を下ろしていると実感した。中国では宋代以後、禅宗を除き仏教は一般に衰退するが、観音信仰は、あらゆる階層に浸透流行したからである。

私の訪問時も、阿育王寺のそれぞれの堂舎の前には、大型の鉄製灯明立てに、赤く太いロウソクをあげる人びとがいた。そのロウソクには「大吉大利」等のほか、「一帆風順」の文句が浮き彫りにされており、以前から観音と海難救済の信仰の関係に注目していたので、なるほどとの思いを深くした。

そのおりには、時間の関係で島影すら望見することができなかったが、観音の霊場として最も崇信されたのは、寧波の東方海上にある舟山群島の普陀山で、文殊をまつる五台山、普賢をまつる四川省の峨嵋山とともに、天下の 3 大仏教道場とされた。とくに海上商人や漁師の信仰をうけ、紹興から明州を通って普陀山にいたる観音霊場巡りが流行し、その場面が絵画に描かれたりしたという。

『平家物語』巻 3「金渡」に、次のような話がある。重盛は、滅罪生善の志が深く、その晩年の安元のころ（1175 － 77）、鎮西の妙典という船頭を呼び寄せ、黄金 3 千 5 百両をあたえ、5 百両はお前にやる、残りの千両は育王山（阿育王寺）の僧に贈り、2 千両を中国の皇帝に奉り、田地に代え、それを育王山に寄進して、わが後世を弔うよう伝えよと語った。妙典がその通り実行したので、いまも、重盛の後世善所を祈ることが続けられているという。

この話は、フィクションと考えられているが（冨倉 1996：477 － 479）、清盛が日宋貿易に熱心であったから、重盛が中国に関心をもっていても不思議ではない。また、五台山が金の南進によってその支配下に入り、日本の入宋僧の巡礼地も浙東の諸寺院に移っていたから、彼らから、育王山の聖地ぶりについて聞くところがあったのだろう。ちなみに「阿育王山妙智禅師塔銘」によれば、後白河法皇は 1170 年代育王山の寺主に、年々贈り物を寄せ、良材を贈って立派な舎利殿を造らせた。こちらは史実である（『攻媿集』巻 110）（日野 1984）。

清盛は、巨万の富を求め海外貿易に乗り出すには、『法華経』の力を借りねばならぬ、

との思いをいだいていたのではないだろうか。これらより、千僧供養は、それに参加・結縁・見物する法皇から百姓までの広範な人びとに、平家こそ海路の安全保障を実現する力、と印象づける意図がこめられていた、と見なすことができる。その意味では、これも海賊対策とならぶ瀬戸内航路整備の一環といえよう。

千僧供養が行われた日取りが旧暦の3月・10月の15日から3日間だというのは、満月からの3日間、すなわち大潮の日からの3日間を意味する。潮汐は1日にそれぞれ2回の海面の高まり（高潮）と低くまり（低潮）を経験する。大潮の日はその差（潮差）は最大になり、小潮の日に最小になる。つまり、大潮は浜辺がもっとも大きく表情を変える時であり、翌日翌々日としだいに潮差は小さくなって行く。それは『法華経』と千僧供養の効果で次第に海が穏やかになってゆくことを印象づけるであろう。それも計算の上日取りが設定されているのだと思う。

清盛の「静海」、静かな海、または「浄海」、浄い海という出家としての名前も、もともと海を鎮める、航海の安全を保障する、という彼の政治目標を、内外にアピールするためのものだったに違いない。

承安4年（1174）3月は、恒例の和田浜での千僧供養が記録に見えない。清盛はこの時後白河法皇や建春門院（平滋子）とともに安芸の厳島に参詣している（『玉葉』『吉記』3月16日条）。また治承元年（1177）10月にも、和田の代わりに、厳島で盛大な千僧供養がいとなまれた。14日から始まる千僧供養のいわば前夜祭として、万灯会が行われた。

万灯会は1万の灯火を点じて罪障を懺悔する法会である。この時は、宮崎と西崎という厳島の社殿を抱きかかえるごとく突出した両岬の間、大鳥居の外を東から西に海中に柵（棚）を仮設し渡し、その柵に3尺の間隔で、松明を上下2段に結びつけた。遙か対岸にも同様の松明の柵を作り、厳島神社の南北の回廊に列座する千僧の座の背後にも、各1本の大松明を林立させる。やがて3重の松明の柵に一斉に火が点じられ、天をも焦がす烈々たる明かりが白昼をあざむく。波に映る一大光明世界について、記録は「海底、ひとへに火を敷くが如し」と記している（「伊都岐島千僧供養日記」）（小松 1996：357 － 377）。

じつは福原の千僧供養の時も、万灯会は行われており、これを歌人西行が実見し、次の歌を詠んだ。

六波羅太政入道、持経者千人あつめて津国和田と申所にて供養侍ける。やがてそのついでに万灯会しけり。夜更くるままに灯火の消えけるを、おのおの点しつぎけるを見て

消えぬべき法の光の灯火をかかぐる和田の泊なりけり（『山家集』中　雑）

西行は少なくとも清盛の義理の弟時忠とは相識の間柄だったから（『山家集』下　雑）、その縁で和田にやってきたのかも知れない。

参考文献

今井林太郎　「摂津輪田荘の一考察」『大手前女子大学論集』16 号、1982 年
岡　元司　「南宋期浙東における墓と地域社会」岸田裕之編『中国地域と対外関係』山川出版社、2003 年
小松　茂美　『小松茂美著作集 12　平家納経の研究　第 3 巻』旺文社、1993 年
髙橋　昌明　『増補・改訂清盛以前』図書出版文理閣、2004 年
藤田　豊八 a「宋代の市舶司及び市舶条例」同『東西交渉史の研究　南海篇』萩原星文堂、1946 年
　同　　b「宋代輸入の日本貨につきて」同上
日野開三郎　「沿海制置使」『東洋歴史大事典』平凡社、1937 年
　同　　「日宋関係史料としての『阿育王山妙智禅師塔銘』」『日野開三郎東洋史学論集　第 10 巻』三一書房、1984 年
冨倉徳次郎　『平家物語全注釈』上巻、角川書店、1966 年
斯波　義信　『宋代江南経済史の研究』東京大学東洋文化研究所、1988 年
　同　　「港市論」『アジアのなかの日本史』東京大学出版会、1992 年
宮崎　市定 a「宋代州県制度の由来とその特色」『宮崎市定全集 10』岩波書店、1992 年
　同　　b「宋代における石炭と鉄」『宮崎市定全集 9 』岩波書店、1992 年
山内　晋次　「平安期日本の対外交流と中国海商」同『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館、2003 年
山下　知之　「阿波国における武士団の成立と展開―平安末期を中心に―」『立命館文学』521 号、1991 年

（神戸大学文学部　日本史学専修）